国立ハンセン病資料館春季企画展

かすかな光をもとめて

―療養所の中の盲人たち―

『点字松丘』発行を喜ぶ盲人たち　1957（昭和32）年頃　松丘保養園

2011年 4月23日(土)―7月24日(日)

開館時間●午前9時半→午後4時半（展覧会入場は午後4時まで）
休 館 日●月曜日、祝日の翌日
（会期中の休館日：4月25日/5月2、6、9、16、23、30日/6月6、13、20、27日/7月4、11、19日）
会　　場●国立ハンセン病資料館 2階企画展示室
観 覧 料●無　料

国立ハンセン病資料館
National Hansen's Disease Museum

かすかな光をもとめて

―療養所の中の盲人たち―

2011年4月23日(土)―7月24日(日)

ハンセン病の有効な治療薬がなかった時代、療養所では失明した人が全入所者の約1割を占めていました。失明は、知覚を失い、手足など他の障がいを併せ持つ多くの入所者に、さらなる絶望を与えました。「誰かの助けを借りないと何もできない」とされていた盲人たちの多くは、部屋の片隅で柱を背にし、虚無感の中で一日を過ごすしかなかったといいます。

戦後になり、化学療法の登場や、全国ハンセン氏病患者協議会(全患協)の結成など、大きな変化が起こりました。その中で「自分たちにも自分の力で何かできることがないだろうか」と各園で盲人組織が誕生し、1955(昭和30)年には、全国組織である全国ハンセン氏病盲人連合協議会(全盲連)が結成されました。盲人の幸福をはかることを目的として、生活改善のための運動をはじめ、全患協の運動にも積極的に参与しました。国民年金獲得や不自由者看護の職員切替えの闘いでも大きな成果をあげた全盲連の活動は、今年で56年目を迎えます。

一方、文学や音楽、陶芸、将棋にいたるまで、さまざまな文化活動も展開し、その活躍の場は療養所の外にも広がっていきました。点字を指ではなく、知覚が唯一残った唇や舌先で読むなど、文字通り血のにじむような努力を続けた人もいました。

企画展では、戦前から現在に至るまで、療養所においてどのように盲人たちが生き抜いてきたのか、生活や運動、そして文化活動を中心にご紹介いたします。

困難であっても様々な活動に取り組む中で自分の可能性を信じ、かすかな光をもとめようとした姿を是非、ご覧いただきたいと思います。

「舌読(ぜつどく)」(邑久光明園)　(撮影:太田順一)

(各園盲人会で発行された機関誌)

『点字松丘』
(松丘保養園)

『道標』
(多磨全生園)

『富士』
(駿河療養所)

『点字愛生』
(長島愛生園)

『白杖』
(邑久光明園)

『燈台』
(大島青松園)

『草原』
(菊地恵楓園)

点字盤と使いやすいように工夫した点筆
(菊地恵楓園)

ハーモニカの練習(菊地恵楓園)1960年代

不自由者看護の職員への切替えを求めた座り込み(大島青松園)1964年

●関連事業

○講演会「多磨盲人会ハーモニカバンドとの思い出」

多磨盲人会ハーモニカバンドのメンバーと交流のあったタケカワユキヒデさん(ミュージシャン)をお招きして、思い出をお話いただきます。

日時:2011年6月12日(日)13:30ー15:00

○朗読コンサート

療養所内の盲人の方々が生み出した文学作品を、宴堂裕子さん(女優)、小池保さん(元NHKアナウンサー)、三宅民夫さん(NHKアナウンサー[予定])の朗読、渥美知世さんのアコーディオン演奏とともに味わいませんか。

日時:2011年7月10日(日)13:30ー15:30

※両日とも入場無料。先着順に150人まで受付。

○学芸員によるギャラリートーク

日時:2011年4月30日(土)14:00ー14:30／5月15日(日)14:00ー14:30

●交通案内

○西武池袋線清瀬駅南口より、久米川駅行きまたは所沢駅東口行きバスで約10分

○西武新宿線久米川駅北口より、清瀬駅南口行きバスで約20分

※いずれもバス停留所「ハンセン病資料館」で下車、徒歩すぐ

○JR新秋津駅・西武池袋線秋津駅より徒歩約20分

○関越自動車道所沢ICより約30分(駐車場より)

国立ハンセン病資料館
National Hansen's Disease Museum
〒189-0002 **東京都東村山市青葉町**4-1-13
TEL 042-396-2909　FAX 042-396-2981　http://www.hansen-dis.jp